講評　みかんの木文庫『どろんここぶた』

「子供たちにどろんこ遊びをして欲しい」という作り手の思いが感じられた作品でした。小さな子供を投影していると思われる、泥んこで遊ぶこぶたが自由かつ、楽しそうで好感を持ちました。

こぶたが洗われてきれいになるところの表現など、シャボン玉を使うなどの工夫が面白く、会場の子供さんの注目も高かったように思います。

技術的には、場面転換などに工夫があればもっとリズムが良くなって一段と躍動感が出たのではないかと感じました。歌は良かったと思います。せっかくなので、もっと音楽や歌があっても良かったのかもしれません。劇全体にリズムも出るし、音楽の楽しさで劇全体の厚みも増すのではないかと感じました。

ところで、私が泥んこになって遊ぶこぶたの楽しさに想像が及んだのは、私にとって楽しかった泥んこ遊びの記憶が蘇ったり、想像が及んだりしたからであって、もしかすると、泥んこ遊びを知らない現代の子供達や、あまり好きでない子供達はあんなに転げ回って泥まみれになるこぶたに共感するだろうかとも感じました。自分の子供を見ていても、昔と違ってずいぶん家の中で遊ぶ印象を受けます。この作品は泥んこ遊び大好きな子ども視点の作品だと思います。私もどちらかというと、子供達には泥んこになって自由に遊んでもらいたい方ですので、「泥んこ遊びから遠い子供さんや、親御さんにこうした作品を通じて共感を得るにはどうしたらいいんだろう」、そんなことも考えてしまいました。

杉山　準（演劇プロデューサー）